

江戸の坂道散策

行人坂 (目黒区)

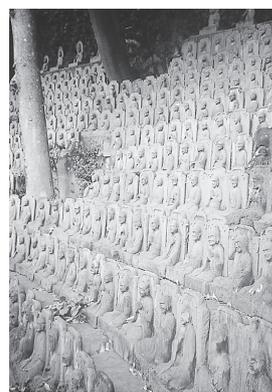


1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第3編集局長、取締役、常務取締役を務めた。この数十年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役に。『タモリのTOKYO坂道美学入門』（講談社）に企画参加。著書に『江戸の坂——東京・歴史散歩ガイド』（朝日新聞出版）がある。

山野 勝 Yamano Masaru 坂道研究家

目 黒区の下目黒二丁目1と8の間を、初めは西へ、次いで北西へと湾曲しながら下り、目黒川に架かる太鼓橋に続く急坂がある。江戸の名坂「行人坂」である。東側に残る大円寺の石垣と、坂を覆う古木が昔の面影を今に伝えており、四季を通じて変化に富む坂である。寛永（二六二―四四年）のころ、出羽国（山形県）湯殿山の大海法印という僧がこの坂を造り、大日如来堂（後の大円寺）を建立して祈願道場を開いた。多くの行人（行者）が修行に参集したので行人坂と呼ばれるようになった。坂上には「富士見茶亭」があり、参詣客や旅人がここで一服し、名物の甘酒や筍、栗飯を賞味しながら、秀麗な富士山を眺めて楽しんだという。また、大円寺下の明王院（大円寺に合併。今は雅叙園）の裏手一帯は「夕日の岡」と呼ばれ、晩秋のころは紅葉が夕日に映えて、美しい光景を醸し出していた。

この行人坂を有名にしたのは、明和九（一七七二）年二月二十九日に発生した「行人坂の火事」である。大円寺の所化（修行僧）長五郎の放火



大円寺境内に並ぶ五百羅漢像。

によるものだったが、折りからの強風にあおられ、目黒から新吉原まで、江戸の三分の一を焼き尽くす大惨事となった。その後、一万八〇〇〇余の死者を供養するために、五百羅漢の石仏が造られ、現在も大円寺境内に静かに佇んでいる。犯人は、火付盗賊改・長谷川宣雄（かの長谷川平蔵の父）によって捕えられ、浅草で火刑に処せられた。幕府は、明和九年は「迷惑」の年として、年号を「安永」に改元した。

コラム坂 一服茶屋

明暦三（一六五七）年に起こった「明暦の大火（振り袖火事）」は「行人坂の火事」よりも大きかった。火元は本郷丸山町の本妙寺（今は豊島区巢鴨へ移転）だったが、施餓鬼に焼いた振り袖が空中に舞い上がったのが原因といわれる。文京区本郷四丁目8と36の間に、本妙寺坂という急坂がある。本郷五丁目側にあった本妙寺の山門に通じる坂なのだ。坂と寺にはなぜか因縁があるようだ。

行人坂アクセス▶ J R目黒駅西口を出て左折、目黒通りを横断し、すぐ右折。さくら情報システムの左脇の道を進むと行人坂の坂上。